

滄浪之情可以濯我纓

楚辭序曰滄浪之水清可以濯我纓

滄浪之水清可以濯我纓

可以濯我足

教者學子之半

禮記曰雖有嘉肴弗食不知其旨也雖有至道弗

學不知其美也是故學子然後知不足教然後知困知

不足然後能自反也知困然後能自強故曰教學相長也

今日教學之半其此謂之乎

多文口行

温故知新

論語子曰温故而知新可以為師矣注温尋也尋

故知新者可以為師

不遠千里

後漢書劉棟字士成北海人負笈從師不遠

千里

前事之不忘後事之師也

史記太史公曰周在序得其道千餘歲不絕矣

本末並失故不長久由與觀之在危之統相法

遂矣野語曰前事之不忘後事之師也

遊笑里司... 戰國策... 孟談謂趙襄子曰前事之不忘後事之師

一 卷 師

文選任廣曰... 宣道皇... 博通群... 而讓... 平... 寒... 之師李善注... 楊子法言... 寒... 市... 不... 異... 價... 一... 寒... 書不勝異... 卷... 之... 平... 寒... 書... 以... 之... 師

文士數奇詩人薄今

高木不遇可尋見

史記李廣曰大將軍青... 以... 漢... 文士... 廣...

數奇注知淳曰數為... 自... 收... 所... 敗... 為... 奇... 不... 偶... 之... 也

白氏洛中集序... 序... 古... 人... 有... 言... 文士數奇詩人薄今... 誠... 者... 斯... 言

一 卷 師

文人相輕

文選魏文帝由論云文人相輕自古而然傳教之於班固伯仲之間耳人善於自見而文非一體鮮能備善之故各以列長相輕所短

非知之難

尚書云非知之難能行之難

漢士衡文賦序云蓋非知之難能之難也

獲麟

左傳哀公十四年春西狩獲麟注云麟者仁獸聖王之嘉瑞也特無明王出而遇獲仲尼傷周道之

不與為嘉瑞之無應故曰春秋而從中興之教絕筆於

不與感嘉瑞之無應故曰春秋而終中興之教絕筆於
獲麟之一句所感而作曰所以為終也猶曰狩蓋唐人終常
賦故本書狩者大野在魯而故言西狩得用狩獲麟又
同傳古高年春西狩於大野時孫氏之車子闕意獲麟
以為不祥以賜厚人仲尼觀之曰麟也也後取之法時
亦未嘗見故推之魯人掌山澤之官也
穀梁傳仲尼從春秋二年文成獲麟

丁字千金

史記之呂不韋以美妾之強者不知立招致士厚過之
至食客三千人是時諸侯多辯士如荀卿之徒者

書布天下シテ呂不韋アチチ乃使客人ナ著列國集論シテ以為八

覽シ六論シ正シ紀シ十餘萬言シ以為備コトシ天地萬物古今之事

端ミテ曰フ呂代表ト春杖ト布咸陽市門懸カ千人其ツ上ニ廷諸シ遊シ

士賓客有シ增損シ一字者シ予シ千人シ

書厨子フツシ 書肆楊子フツシ法言曰フツシ學書而不要フツシ件フツシ尼謂フツシ

晉書シ書簾シ

屋下架屋ウチニカウラシ 清於シ藍寒シ於水シ

世說シ庾仲初イラウ作揚都賦シ成シ以示シ庾亮シ以親族之シ陳大

為其シ名價シ奇シ三シ二シ章シ四シ三シ都於其人シ竟シ馮都下シ為シ

二貴謝シ大傳シ不得シ余也シ是屋下架屋身事シ擬シ學シ

而無不檢シ徒シ注シ王シ是論揚雄太玄シ銀シ以シ玄シ經シ雖シ妙シ

而無不檢徒注王隱論揚雄太玄經曰玄經雖妙
非益也是以古人謂屋下架屋笑顏或序曰魏晉以
未死者諸子理重事複逆相模效補屋下架屋狀
上施杖耳

前將蓋

漢書劉歆謂揚雄曰宮自昔今學子者有亦利然
尚不能明易又如玄何吾是後人用復嘗說也雄笑
而不應注朕皮曰胡音部小兒也

文室過雀

千字文秋收冬藏
今季世俗以此文為文室過雀
帝未詳

カスハ ヒモ

借者白物 体三謂也

朝野

會載借他書第一廢他書第二廢

獨學而無友則孤陋而寡聞

札記獨學而無友則孤陋而寡聞 互不相親也

切晁晁磨

毛詩有斐君子如切如磋如琢如磨注斐文章貌

也治骨曰切象曰磋玉曰琢石曰磨道其學而成也

其聰規諫以自脩飾如玉石之見琢磨也

行有餘力學文

行有餘力學文

論語子曰弟子入則孝出則弟... 凡愛身而... 凡愛身而...

論語子曰弟子入則孝カキ出則悌タカ謹チ而信チ汎愛衆而親チ仁行有餘力則以學チ文注馬融曰文者古之遺文也
事編三絶コトハヤクニシテ

史記云孔子晚而志易序易家較系家詭卦文
言讀易事編三絶曰從我數年若是我於易則極ヒトクニ

如日出之光

顏氏家訓云幼而學者如日出之光老而學者如秉燭
夜行備賢自暝而無見也

如秉燭夜行見上注

朝陽道夕死可矣

論語子曰朝聞道夕死可矣

下推井シ

漢書ニ董仲舒ト少就シ學ル俗謂ク董生常ニ下推シテ讀ム
書シ弟子ト不見ニ其面シ

不恥下問ス

論語子曰敬ヒ而好ク學シ不恥下問シ是以謂フ之レ文也

人能弘道シ

論語云人能弘道非道ハ弘ム

學也祿在其中シ

論語子曰耕ハ也ハ饑ニ在其中ニ矣ハ學也祿ハ在其中ニ

仰之放高

論語顏淵曰仰之放高鑽之放堅注言

不窮盡也

學而知之者次也

論語子曰生而知之者上也學而知之者次也困而學之者

又其次也注孔在國曰困謂有所不通也

玄之又玄屋下作許高鑽許堅也

青於藍

孫卿子之學不可以已青取之藍而青於藍冰生於

水而寒於水

口筆

抱朴子吳生之論者不盡言是筆不及口也言有
赴遠之用而書為遺忘之備是以成平斬說定
徒都之巧子房与言致吐握之宿悟

折桂枝

晉書云郡詵字廣其公舉賢良射策為天下第一
武帝回躬自以為何如詵曰猶桂林之一枝台六年
之行玉今詞場折桂始於此矣

鳥迹

衛瓘四解書勢首在黃帝祖誦蒼頡始作書契

代結繩蓋取鳥迹以興思也黃帝至三代其文
不改夫子用篆書焚燒先典而古文絕矣

草聖

後漢書張芝字伯英善草書絕妙時人謂曰臨池學
書池水盡墨事訖謂曰伯英草聖家中衣笥
先書而後練之

誠子錄

世說事仲將能書魏明帝起殿欲安榜使仲將登
樓題之既下頭髮皓然曰誠兒孫勿復學子書

千里面目

顏氏云真草書迹後漢田意江南諺云尺牘書疏
千里面目兼晉宋餘俗相與事之

飛白

書判云余飛白者後漢左中郎將蔡邕所作也王隱
王指並云飛白壹特制本是宮殿題署勢既任
文字宜輕微不滿名為飛白王僧虔飛白八分之輕者
雖有此說不言起由余漢靈帝喜弄弄詔蔡邕作聖
皇篇成雋都門上時方循觴鴻都門伯喙待詔下
見役人以亞帝成字心有悅焉歸而為飛白之書漢

未魏初以題署官圖其體有二部法於今而躬後
於小篆自非奈必誤妙豈能詢此耶張芝之草書
得易簡流速三極奈也飛白得花艷飄蕩之
極字之逸越不復過此二途余王羲之之獻之蓬
其極

折角

後漢書云五鹿充宗用權當世而朱雲有
曰解莫有能折者而折首論難遭枉五鹿君
不能吞諸儒為之語曰五鹿山嶽朱雲折
其角

右兩三卷之書乎今見上卷而已後葉

得全本者補書字出損修後了

延平山房藏印仲冬音肯定類世音備心寶
字

觀智院藏 世俗諺文（國寶）解説

本書は京都市教王護國寺なる觀智院の藏にして、昭和二年七月國寶に指定せられたるものなり。

本書は、この序文に明かに記されたる如く、當時第一流の學者たりし源爲憲が藤原道長の長子、春宮權大夫頼通（時に年十九、後に關白となる。所謂宇治關白なり）の爲に編したるものにして寛弘四年に成りしものなり。この本に寛治とあるは寛弘の誤寫なること著しく、爲憲は寛弘八年に歿せしものなれば、寛治はその歿後八十年許にして、その四年は丁未にあらず、寛弘四年は正しく丁未なり。爲憲は曩に本會にて複製せし口遊の編者にしてその著には三寶繪、本朝詞林など著しきものあり。いづれも世に名高きものなるが、本朝詞林は今傳ふる所を知らず。この人の事は口遊の解説に略叙したれば今贅せず。

本書は卷上のみなるが、序文に記せる如く三卷より成れるものと見えたり。而して群書類從に收むる本朝書籍目録を見れば、二卷とあり。按ずるに序文中に「管見所及且二百五十二門六百卅一章勅成三卷」とあるが、この上卷には二百二十一章を收めたれば、三卷に分てりしことは想像にあまりありて、書籍目録の二は三の誤なるべし。而して本書の外題の下に「中下闕」と記し、末に記せる賢質の奥書に「今見上卷而已」とあれば、中下二卷を佚せることは昨今の事にあらざるを見るべし。かくてこの書の目録と本文とを對するに上卷は完備せりと見らる。本書はかくの如く闕本たりといへども實に現今唯一の傳本にして、未だ他に古寫本の傳ふるを知らず、續群書類從に收むるものも亦この本の傳寫本によれるものなりとす。

本書は當時世俗の話頭に上る諺語について、その出典と本義とを知らむとする人に便すべく編したることはその序文に明かなり。今はこの一卷のみなれば全豹を知ることに難しといへども、編者が「内外本文」といへる如く、佛書漢籍を主とせるものなるが、更に本邦の古典にも及べり。その書目を檢すれば、本邦の古典にては日本紀と職員令との二部に止まるが、佛書にては經律その他にわたりて九種を引用し、漢籍に至りては六十種をこえたり。而してその引用の量より見れば漢籍より引く所、二百五十項を過ぎ、佛典よりは十五項、國書よりする所四項に止まれり。これを以て、一は當時の世風を見るべく、一は編者の學問如何を見るべし。而して編者が今案を加ふる所また六七條あり。

本書にあぐる所は上の如くなるが、しかも、當時の文藝はた思潮を觀察せむものにとりては好個の研究資料たるはいふをまたざる所にして、後世までも用ゐられて、それらの源となりしものとも思はるるなり。たとへば、平家物語に「浦嶋が子の七世の孫にあへりしにもすぎ云々」といふ語あるが、浦嶋子が七世の孫に逢ひきといふ事は史傳に全く無き所にして、その傳には反對に七世の孫に値はずと明記せり。かくて他の世界に行きかへりて七世の孫に逢へりといふ傳説は讀齊諧記に出て、蒙求の劉阮天台の條に示す所のものなり。如何にしてかゝる逆なる事柄が平家物語に傳へらるるに至りしかといふに、この書に「七世孫」と題して讀齊諧記の劉阮天台の故事を引けるが、題目の下に「本朝浦嶋子同事也」と注せり。これによりて案するに平家物語の作者はまさしく本書の題目によりかの文を書きたることは殆ど疑ふべからざるなり。以上は著しき一例なるが、本書が、その頃の文藝家の帳中において利用せられし事多大なりしことはこれ亦想像に餘りありと云ふべく、本邦中世の文藝を咀嚼し、世態人情を知らむとするものにとりては同じ著者の三寶繪、口遊と相待ちて頗る重要な價值を有するものなるべし。惜むべきは本書が上卷に止まる事なるが、これは今はた如何ともすべからず。惜むべし。

原本は卷子一軸にして、表紙は淡黄色の紙に桐の紋様を萌黄色にて置けるものを用ゐ、幅一尺三寸八分、高八寸八分五厘許。白、黄、暗紅三色を交へたる啄木の紐をつく。外題には

と墨にて書き「上」の下に小さく「中下闕失」と朱書し、「源爲憲撰」の左に小さく「書寫記年不詳」と朱書せり。なほ外題の右に二葉の小箋を貼せるが、その外題に近きものは「五拾四號」と記して「生野」といふ朱印を押し、その右なるは「七拾四號」と記せり。表紙は後世加へしものと見ゆるが、卷末にも新に加へし紙（長一尺二寸二分）ありて、それには、

右兩三卷之書乎今上卷而已、後葉得全本者補書焉虫損修復了

延享四歲次丁卯仲冬五日皆定額貫主僧正賢賀春秋七十四

と識せり。その次に七寸五分許の餘白ありて、白木の軸に附く。上の識語によれば延享の時に全卷を修復せしこと明かにして、表紙もこの時に加へしものなるべく、外題の文字は同じく賢賀の手跡と思はる。

表紙の裏を見るに、初め六寸五分許、白紙にして、次に七寸一分許の古き紙を、七寸八分許の幅の紙にて裏打せるものを貼し、次に幅二寸五分許の白紙ありて、本文を記せる古紙にうつる。これらの白紙は寫眞には略せり。

上述の古き紙は本文の紙と同質にして、其の高さ八寸八分五厘、天地の界は上の紙端より六分五厘許の所と下の紙端より三分五厘許の所とにありて、その間七寸八分弱、上の界より三分五厘下りて横線を引き直せり。毎行の界は墨にて施せるが、この紙にては十行半あり。その各行に、各三段にわたりて目録を記せるが、上卷の目録にはあらず。しかも體裁を一にするを見れば、恐らくは今散佚せるいづれかの卷の目次の一部分をここに保存せしなるべきなり。

本文は楮紙四十九張を用ゐたるが、高さ八寸九分、紙幅は必ずしも一定せず。今その大なるものより示せば次の如し。

一尺五寸七分 第四十七

一尺五寸六分餘 第四十八

一尺五寸六分 第四十六

一尺五寸四分 第五、十、十五、十七、十八、十九、廿二

一尺五寸四分弱 第十六

一尺五寸三分五厘 第二、三、四

一尺五寸三分餘 第十二、十三、十四、二十、廿一

一尺五寸三分 第六、七、九、四十一、四十三、四十四

一尺五寸二分五厘 第四十二

一尺五寸二分 第十一、四十五、四十九

一尺五寸一分五厘 第八

一尺四寸九分 第廿四、廿五、廿七、廿八、卅六

一尺四寸八分五厘 第卅五、卅九

一尺四寸八分餘 第卅一、卅八

一尺四寸八分 第廿九、三十、卅二、卅七、四十

一尺四寸七分五厘 第一

一尺四寸六分 第卅三

一尺四寸四分 第廿六

一尺四寸三分五厘 第廿三、卅四

さて第四十一張までは天地及び行の界を施したるか、第四十二張より第四十六張までは行の界なくして、横に五の墨線を引く。即ち上の紙端より一寸一分許の所に第一の線を引きそれより下一寸九分弱の所、その次八分、その次八分、その次、四寸三分五厘餘に最下の線を引き、その下二分許にして紙の下端に至る。第四十七、八、九の三張は又異にして上の紙端より九分餘の所に横線一條を劃せるのみなり。

第四十一張までの界線は粗表紙裏に貼せるものに似たるが、大體天地の間七寸八分餘、上界とその下線との間三分餘、行は紙の切目と一致せず、大抵一張二十二行より二十三行に至る。しかも末に到るにつれて亂雑になれり。

第一張最初の一行は空白にして次行に内題をかけるが、この紙、初の部分、上方缺損し、白紙にて補へり。随つて内題の文字も上部缺けて上卷の二字のみ見ゆ。かくて、その第三行より第四張の第八行までにわたりて目録を書けるが、一行を三段にし、上部の第二の界線より書きはじめたり。目録の次に空白二行をおき、次の行に「世俗諺文序」と題し、その次の行より第五張の第十八行にわたりて序文を記す、序文は天の界線の直下より書き起せり。次に空白一行ありて

世俗諺文上卷 散班朝散大夫源爲憲撰

と署し、次の行より本文にうつる。本文は題目を上界線の直下より記し、説明は第二の界線の直下より起り。第四十二張以下は題目を第一線の上二字より起し、説明をその線下より起せり。

本書は通卷墨書一筆なるが、書寫は平安朝末期ならむか。而して序文中の寛弘の年號を寛治と誤寫せるはたま／＼これが寛治以後の書寫なることを物語るものといふべし。本文は返點連讀符、四聲清濁の點を施し、又訓點を多く加へたり。これらは書寫當時に施したるものならむ。又欄外及傍に校異訂正を加へたるもの少しく見え、別に加へたる訓もあり。これらは本文とは筆者異なるべけれど、時代は下らざるものなるべし。

本文に加へたる假名は古體のもの往々存し、又その訓には「桑田」を「クハフ」といふ如き古語を研究する有力なる資料たるものも存す。然れども往々誤寫と目すべきものあり。例へば、「タフトヒテ」とあるべき「ヒ」を「セ」とし、「ヒクレヌ」とあるべき「ク」を「タ」とせるが如きものなり。これらは傳寫の際の誤なること著しく、これが底本に既に假名を施してありしことを想像せしむるなり。本書には又誤りて訓を施せるあり。「天之瓊矛」の「瓊」に「ヤツ」の傍訓を施せるはその注に「此云奴」とある「奴」を音の「ヌ」を示すものといふことを知らずして「ヤツ」と認めたるなるべく、又「八歳而亡」の「而」に「ノミ」の訓をつけたるは「亡」を「已」と誤りて「而已」と誤認して加へたるものたること著し。本文に於いても「尠雅」を「小雅」と誤れるが如きあり。かくの如く訛誤往々存すといへども、他に類なき唯一の書なれば重んずべきはいふまでもなく、上述の如き訛誤は何人にも直ちに正しうべきものなれば、學者をして困迷せしむるが如き虞はなし。學者この複製本を以て研究せば、世上に流布せる寫傳本の誤（多くは古體の字を知らざるによる。）などは容易に識別しうべきなり。

この複製は原本大にせるものなり。

昭和六年一月廿八日

山田孝雄

昭和六年一月廿五日印刷

(非賣品)

29. 6. 1

昭和六年一月廿五日印刷
昭和六年一月廿八日發行

(非賣品)

發行兼印刷者 古典保存會

右代表者 東京市下谷區上野公園東園

七條

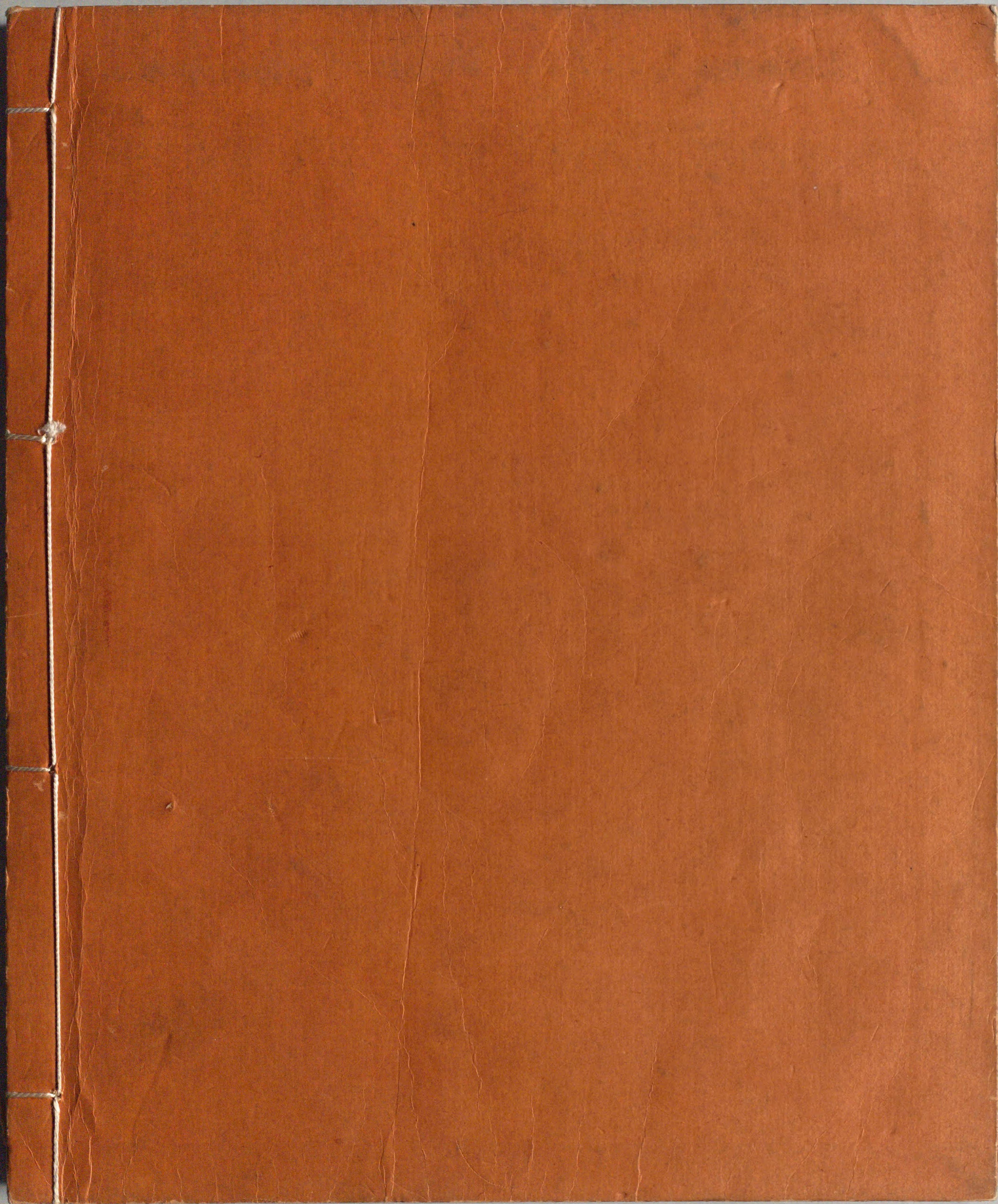
印刷所 金屬版印刷所

東京市神田區花房町五番地

古典保存會事務所

電話下谷六七八八番

振替口座東京四四九四八番

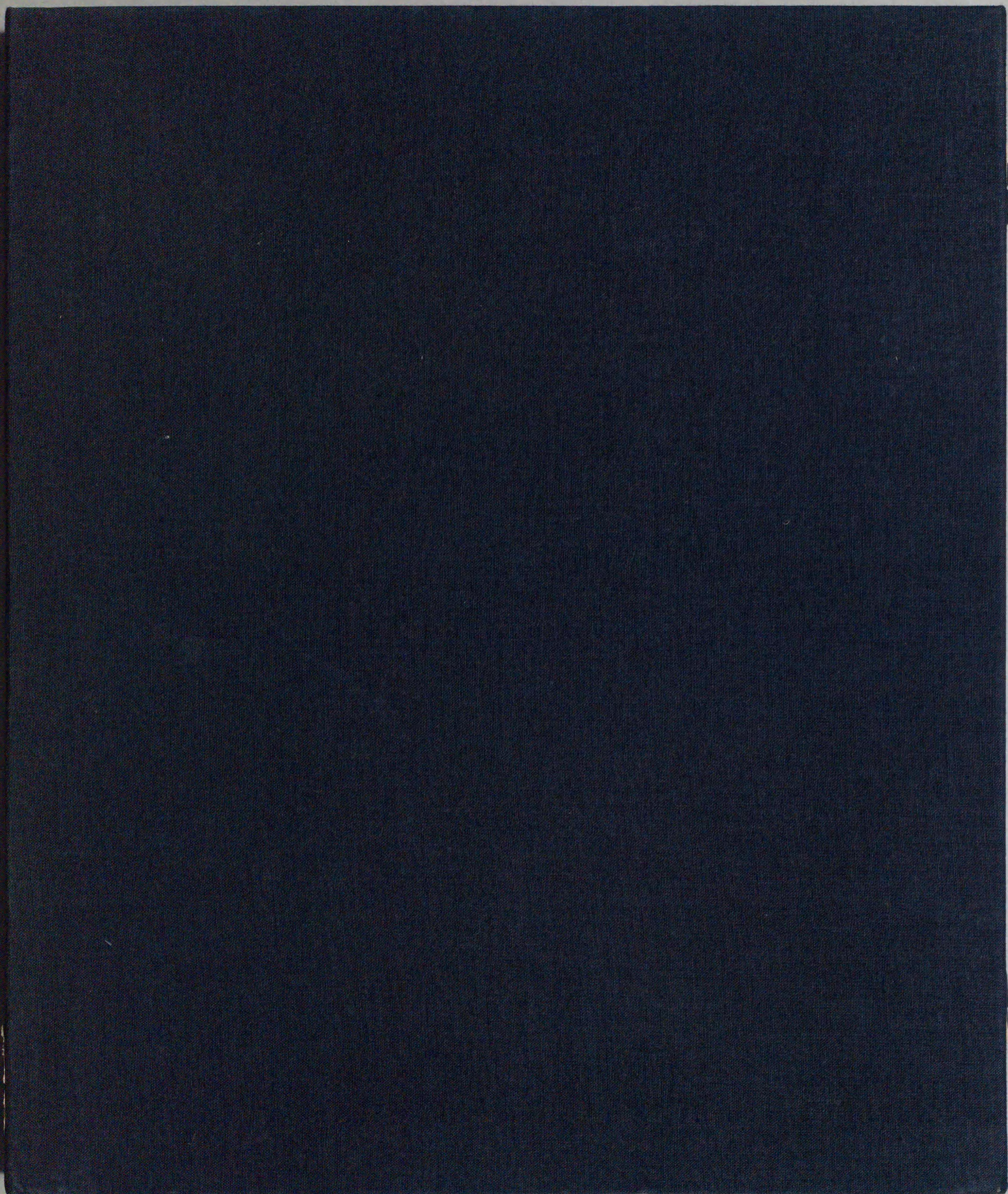


世
俗
諺
文

388.8
M494s



00216514

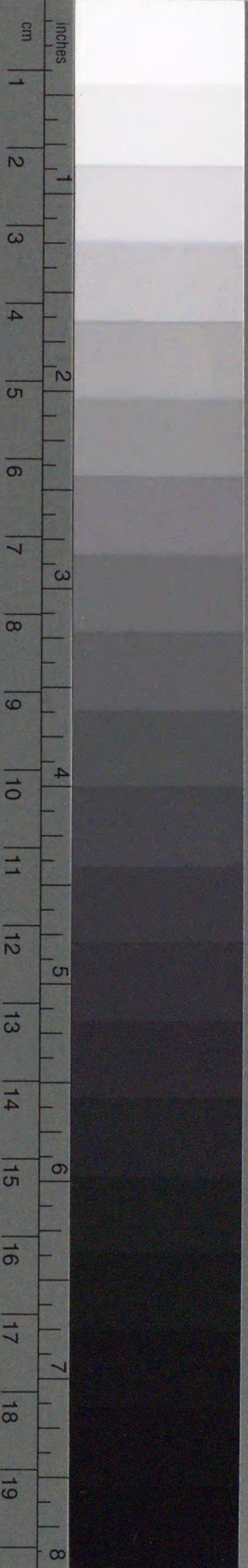


Kodak Gray Scale



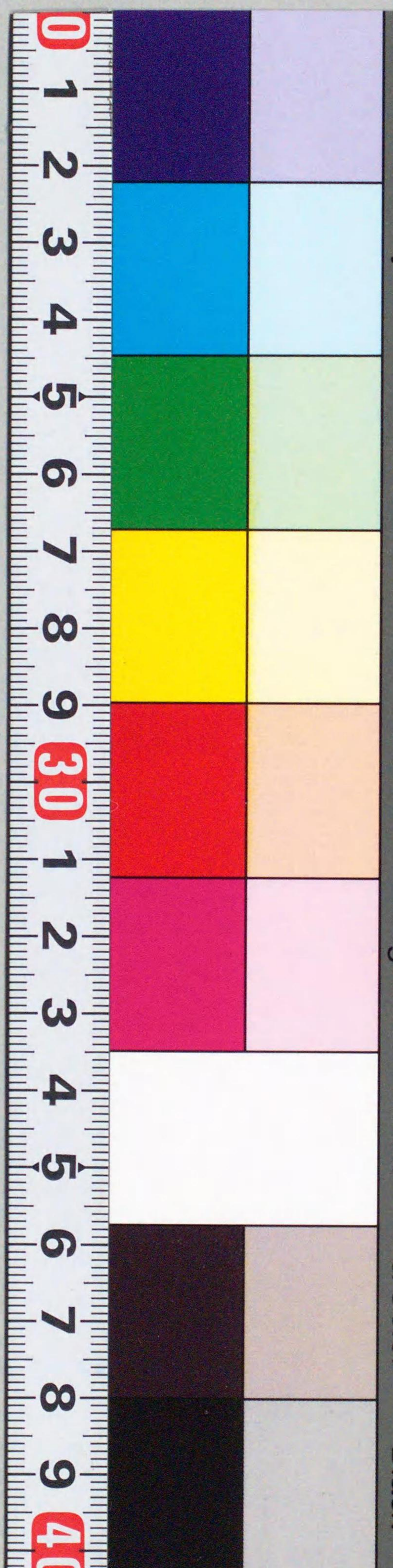
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 **30** 1 2 3 4 5 6 7 8 9 **40**